JPS サステナビリティ推進室

JPS SHIRETOKO REPORT

2023.7

TABLE OF CONTENT

P.2
Introduction

P.4
世界遺産
知床の特長

P.7
ヒグマとの共生

P.10
知床の植物

P.11
エゾシカ
アイヌについて

P.12
佐藤雅子さん
インタビュー

P.18
研修後記

INTRODUCTION
サステナビリティ推進室

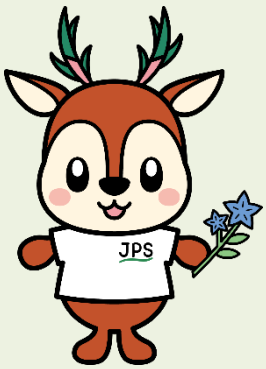
サステナビリティとは、自然環境や社会、健康、経済などが将来にわたって、現在の価値を失うことなく続くことを目指す考え方のことです。

ジェーピーエス製薬は自然の恵みを取り扱い、人々の健康を守る企業として、社会と環境への責任があります。2020年に発足したサステナビリティプロジェクトは、当社のビジネスを持続可能で環境に配慮したものにし、同時に、社会的価値を提供することで地域社会に貢献するよう努めることを目標として活動を始めました。

そして2023年6月、サステナビリティプロジェクトは「サステナビリティ推進室」へとステップアップしました。プロジェクトとの違いは名称が変わっただけではありません。一時的・限定的な活動ではなく、社会と環境に関わる活動に永続的に取り組んでいくという使命を持っています。

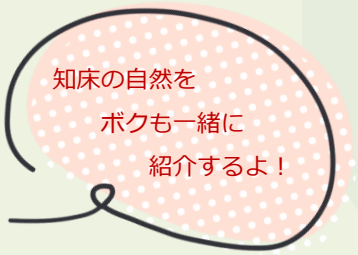
サステナビリティという概念は世界的に広がっていますが、当社での取り組みはまだ始まったばかりです。持続可能な企業となるためには社員一丸となっての活動が必要です。サステナビリティ推進室は、社員一人ひとりが環境と社会への影響を理解し、取り組みに賛同していただけるよう、情報発信と提案を行っていきます。

◆サステナビリティ推進室メンバー
本社：6名
栃木工場：5名



ジェイくんも研修メンバー！

ジェーピーエス公式キャラクター「ジェイくん」も知床へ行きました！



プロフィール
性　別：男の子
生まれ：栃木県
住みか：神奈川県
趣　味：お散歩
好きなお花：桔梗

INTRODUCTION
今回の研修について

SDGｓの重要性がますます高まる現代社会において、サステナビリティ推進室は、果たすべき社会的責任を常に意識して活動してきましたが、長らくデスクワークに専念してきた私たちは、自らの活動が具体的にどのように社会に貢献しているのか、時折疑問に思うことがありました。そこで、私たちの活動がより一層意義深いものとなるよう、環境保護の最前線である知床に研修することを決意しました。

この知床研修の目的は、実際の自然環境保護活動を通じて、当社でのサステナビリティへの取り組みが社会にどのような影響を及ぼすかを肌で感じることです。最終的には私たちが取り組む活動がどのように社会に寄与するのかを理解し、より意欲的に社会貢献できる取り組みを企画・提案していきます。

また、知床研修の成果や学びを社内外に広く発信することも大切な目的でした。研修前からSNSを活用し、当社フォロワーに知床の魅力や課題について積極的に発信しました。その結果、Instagramではリーチ数が5倍に増加し、積極的なアクションを実行したアカウントは4倍、当社プロフィールへのアクセスも1.5倍になったことは非常に喜ばしい成果でした。

私たちは知床研修を単なる研修ではなく、真摯な学びと成長の場として捉え、しっかりとした意義を持って取り組みました。

このレポートでは、知床研修の詳細な内容や体験、そこから得られた気づきと学び、そしてこれからのサステナビリティ推進室の取り組みに対する展望を報告致します。知床研修を通じて得た知識と経験を活かし、より効果的なサステナビリティ活動を推進し、社会に貢献するための新たな一歩を踏み出すことを目指しています。

このレポートが、より一層の理解と共感を得るきっかけとなり、社内外の皆様にとって価値ある情報となることを願っております。

知床連山とサステナビリティ推進室

知床財団
岡本征史さん(写真上段左から2番目)
草野雄二さん(写真上段左端)

知床研修参加メンバー
8名（撮影者1名）

世界自然遺産
知床の特徴

知床はどこにあるの？

知床半島は北海道の北東部に位置する半島です。火山活動などにより生み出された山、断崖、湖などの美しい景観や、ヒグマをはじめとした様々な動物、シレトコスミレなどの希少な植物が生息する環境が特徴です。

流氷の南限としても有名で、冬には海一面が氷に覆われた絶景を見ることが出来ます。

世界自然遺産への登録

1970年代に昭和の名曲「しれとこ旅情」がヒットし、豊かな自然を味わうことが出来る観光地として人気のあった知床半島は、2005年に世界自然遺産に登録されました。

世界自然遺産として登録された理由は３つあり、以下が評価されました。

① 冬に訪れる流氷がもたらす豊かな生態系
② 絶滅が危惧されているオジロワシやシマフクロウなどの希少な動植物の繁殖地
③ 国内ではトップレベルの自然保護管理体制

また、知床は世界自然遺産としての登録範囲も特徴的で、陸地だけでなく周辺の海洋も含む地域が登録されています。このような世界自然遺産の登録は日本国内では知床が初めてでした。

海・川・山の連続した珍しい生態系

知床の海には様々な海洋生物が集まり、海で育ったサケ・マスが川に戻り、山では川のサケを餌にするクマや猛禽類が暮らし、陸上の動物が土にかえって山を豊かにする循環を形成しているよ

海

知床の海は非常に栄養豊富なため、様々な生き物がやってきます。冬にロシアからやってくる流氷とともにプランクトンが運ばれ、流氷が溶けるとともにプランクトンが大繁殖することで栄養が豊かな海が生まれます。プランクトンを求めて小魚が集まり、それを餌にする魚や鳥や海獣など様々な生物がやってきます。

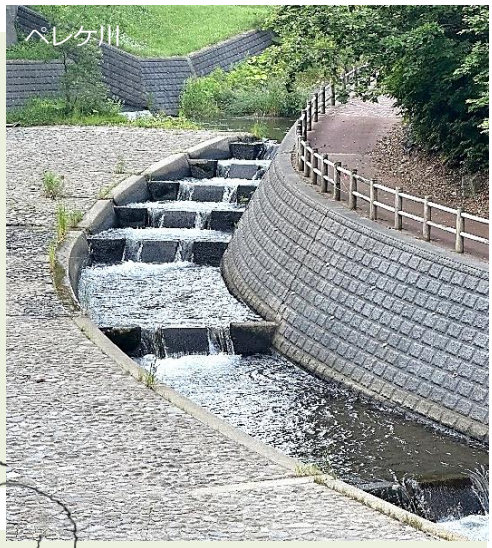
流氷の季節にはアザラシやトド、夏の時期にはシャチやクジラなど大迫力の生き物に出会うことが出来ます。

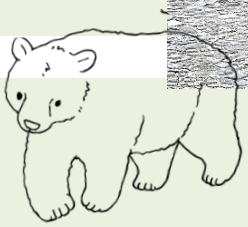
川

8月頃にはサケやマスが産卵のために海から遡上します。川周辺ではやってきたサケやマスを捕食するため、ヒグマも姿を見せます。

しかしながら、海水温の上昇やダム設置など自然環境の変化によりサケやマスの数は減少しており、それを餌としている絶滅危惧種のシマフクロウも減少していることが問題となっています。

サケ・マスの減少を食い止めるため、魚道の設置などの取り組みも行われています。





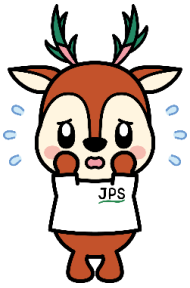
山

山の中にはエゾシカ、親子で森を歩くヒグマ、森のなかをチョロチョロと走るシマリスなど大小さまざまな生き物が生息しています。研修で森の中を訪れた際、森の奥にある1mほどの大きなオジロワシの巣を観察しました。知床の森では暮らす生き物たちの姿に驚かされました。

知床の森は針葉樹と広葉樹が混じりあう「針広混合林」が特徴で、貴重な森を守るために「しれとこ100平方メートル運動」をはじめとした、知床自然センターやボランティアによる様々な活動が行われています。

知床本来の森を
100年かけて取り戻す

今では世界遺産に認定されて希少な生態系を育む知床半島の自然も、
昔は乱開発の危機にさらされていたんだ・・・



「しれとこ100平方メートル運動」とは

1977年、乱開発の危機にあった知床の土地を保護するため、当時の北海道斜里町長の藤谷豊氏が買い取りに必要な寄付を募りました。
買い取った開発跡地を保全し、原生の森を復活させる取り組みが「**しれとこ100平方メートル運動**」です。

この運動は全国から多くの賛同を得て、
1997年には寄付金額が5億2千万円となり、
ほぼ全ての土地の買い取りをすることができました。
そのため同年より「**100平方メートル運動の森・トラスト**」へと発展し、かつての原生の森と生態系の再生を目指した取り組みを現在まで続けています。

ボランティアの皆さんと協力
して植えた広葉樹なんだって✨
立派に育つといいな～！

森づくりは、100年単位の長期的な目標と
20年ごとの中期的な目標の達成に向けて、
5年ごとに回帰作業が行われています。

今現在のしれとこ100平方メートル運動は、「森林再生」「生物相復元」「運動地公開」の3つの目標を設定して森づくりを行っています。植樹活動、サクラマスの復元、ワークキャンプや知床自然センターでの講演などが代表的な活動です。

エゾシカに樹の皮を食べられないよう、
ネットを巻いて樹木を保護している様子⇑

1本の木が1年間で吸収できるCO_2の量

木のCO_2の吸収量は、樹種や年齢によって異なります。
例えば、オヒョウが1年間に幹が1cm樹高が1m生長した場合、1年間で吸収するCO_2の量は約12kgです。
日常生活を見直し、身近なところからCO_2排出量を減らしていくこともとても大切です。

ヒグマと共生するために…

知床半島には約400～500頭のヒグマが生息しています。ヒグマは国内では北海道のみに生息し、知床を象徴する重要な生き物です。
本来であればヒグマは人を避けて生活していますが、最近では人を恐れない「人馴れ」したヒグマが増え問題となっています。人馴れしたヒグマは大胆不敵な行動を取るようになり、とても危険です。
ヒグマと隣り合って暮らす知床半島では人間とヒグマの軋轢を低減するため、知床財団の方々などにより様々な取り組みが行われています。ここではその取り組みのいくつかをご紹介します。

豆知識

ヒグマの食べ物は？？
雑食性で、フキやミズバショウ、木の実などの植物、アリなどの虫、サケやマスなど魚類、シカなど哺乳類を季節によって捕食しています！

ヒグマの走る速さはどのくらい？？
ヒグマは時速60kmで走ることができます。
これは100メートルを約7秒で走るスピードです！

1 追い払い

道路沿いや遊歩道の中、住宅裏の斜面など私たちが「ヒグマにいて欲しくない」と考える場所にヒグマが現われた場合は、原則として追い払いを実施します。
追い払いは、短期的にはヒグマ見物車両の渋滞による交通事故の発生防止など人間側の安全確保、中長期的には、人間との無害な接触をヒグマが*繰り返し経験することによる「人馴れ」の促進を防ぐことが目的です。*

2 生態調査の実施

ヒグマの目撃情報があった際には現場周辺をよく観察し足跡、移動経路、どんな食べ物があるかなどを調べます。糞や体毛は個体識別のため採取しDNA分析を行います。DNA分析を参考に個体数の調査も実施しており、正確な個体数を明らかにすることで知床半島からヒグマを絶滅させることがないよう管理しています。

3 電気柵の設置

ヒグマを人の生活圏に近づかせないため、知床半島では街中を電気柵で囲っています。特に学校の周りにはしっかりと電気柵が張られ、ヒグマ侵入防止に効果を発揮しています。また一部の畑では農家の皆さんが自主的に電気柵を設置しており、作物をヒグマによる食害から守っています。
電線は雑草や倒木など何かが触れると、そこから電気が逃げてしまうため定期的にメンテナンスを行う必要があります。

4 危険なヒグマの捕獲(補殺)

高栄養で消化しやすい人間の食べ物は、ヒグマにとって極めて魅力的な食べ物です。そのため一度餌付け行為や生ごみの管理不徹底などで人間の食べ物を口にしてしまったヒグマは、再びそれを得ようと扉やガラスを破り倉庫や人家に侵入、人や車につきまとうなど人への警戒心が低いヒグマが生まれてしまいます。そのような「危険なヒグマ」は人身被害防止のため、基本的に「捕獲（捕殺）」が選ぶべき対応になります。

斜里町立知床博物館では実際にヒグマの咬み跡がついた缶とボトルが展示されており、人のすぐ近くにヒグマが生活しているのだということが分かります。

町内にはヒグマが人間の食べ物と距離をおけるよう、「とれんベア」と呼ばれる頑丈でヒグマによって開けられない仕組みのヒグマ対策ゴミステーションが設置されています。

5 住民や観光客への注意喚起

ヒグマが頻繁に現れている地区では注意喚起をする看板の設置、チラシの配布などで住民や観光客に呼びかけを行います。
いざ観光地にヒグマが現れた際にもその場を緊急閉鎖し安全を確保しています。閉鎖後は避難誘導や周辺の調査を行い、翌日のパトロールを終え安全が確定次第、解放されます。
また、地元の幼・小・中・高校にてヒグマの生態や出会ってしまった時の対処法を教える「ヒグマ授業」を実施しています。
これは短期的には子どもたちの登下校時の安全確保、長期的には子どもたちが大人になった後もヒグマを正しく理解し、問題個体を作りださないような生活をしてもらうことに繋がります。

「餌をあげない」

「近づき過ぎない」

ヒグマのために守るべき3つのこと

「つきまとわない」

人間と近い距離で出会っても、ただ写真を撮られるだけで怖い思いをしないなどという状況を何度も経験したヒグマは、次第に人間の存在を恐れなくなり、昼間から平気で人前に出てくるようになります。このような現象が「人馴れ」です。
「人馴れ」したヒグマが即危険なのではありません。
人との距離が近くなり、餌付けされる機会も増えるなど人身事故につながる危険なヒグマを作り出す一歩前の段階であるということが問題なのです。
ヒグマの命を守るためにもヒグマについて正しく理解し、ルールを守らなければなりません。

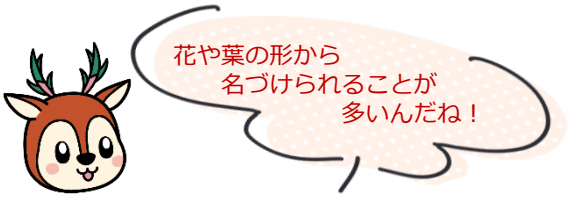
写真：佐藤 雅子さんFacebookより

知床の植物

多くの自然に触れながら森を案内していただく中で
普段見ることのできない植物に出会うことが出来ました。

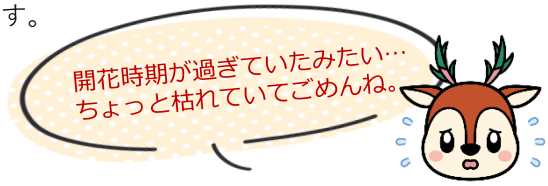
クルマユリ

色鮮やかなオレンジ色に濃紅色の斑点模様が特徴ののクルマユリは、つぼみも花も真下を向いています。葉の形が車の車輪に見えたことから、クルマユリ（車百合）という名前になりました。



オニアザミ（アメリカオニアザミ）

和名にはアメリカとつきますが、ヨーロッパが原産のアザミです。外来種の一つで、非常に繁殖力が高く、種子の飛散や根が残っていることで増加してしまうため駆除が大変な植物です。



ミミコウモリ

葉の基部が茎を抱くように生えていて、その形が耳に見えることから「ミミコウモリ」と名付けられました。大きな葉はコウモリが羽を広げているようにも見えますね。開花時期は7月頃で、可憐な白い花を咲かせます。

キツネノテブクロ（ジギタリス）

かわいらしい名前の花ですが有毒植物です。強心利尿薬として利用されたことも有名ですが、現在は薬用としての栽培は行われていません。5月から6月あたりが見頃と言われていますが、7月の知床でも綺麗な花を見ることができました。

エゾシカについて

知床ではエゾシカの増加が問題視されており、
北海道全体に生息するエゾシカは2018年時点で約66万頭といわれています。
2021年には、全道で約14万頭のエゾシカが捕獲されました。

生息数の増加が問題になる理由として、森の再生への影響が挙げられます。
エゾシカは広葉樹の樹皮を好んで食べるため、再生運動で植樹した木も
損傷を受けて枯れてしまう危険性が高まります。

そこで、知床財団ではエゾシカが飛び越えられないように「鹿柵」を設置したり、
木に保護シートを巻いて樹皮が食べられないようにしたりというように、
様々な対策を行っています。
知床の森の再生とエゾシカとの共存を目指して、現在も活動を続けられています。

アイヌと植物

アイヌ民族は日本の東北北部、北海道、樺太、千島列島で暮らしていた先住民です。アイヌの人々は自然や自然から作られる道具のすべてをカムイ（神）と考え、共生していました。

知床の西に位置する斜里町では、町の花を「ハマナス」、町の木を「ミズナラ」としています。ハマナスはバラ科の植物で、鮮やかな赤紫色の花が特徴的です。北海道の花にも指定されています。アイヌ語では「マウニ」と呼び、木の幹を削ってお茶にしたり、根を薬として使用したり、果実は食料として利用されてきました。

ミズナラはブナ科の落葉高木です。アイヌ語では「ペロニ」と呼びます。アイヌの人々はミズナラのどんぐりを煮て、干したものを保存食にしていました。薬や染料としても利用できたようです。三つ又になったミズナラの木は山の神様の木なので切ってはいけないとされていました。

アイヌ文化では、色々なものを木から作ります。枝の生え方が曲がってしまった木があったら、その部分を切って護符を作り、儀式に使った記録もあります。

このようにアイヌ民族は植物と共に生き、食料や薬、道具として最大限活用し、大切に扱っていたことが分かりました。

佐藤雅子さんインタビュー

知床の美しさ、厳しさを一枚の写真に閉じ込め、SNSを通して多くの人と共有する、その背後には一人の趣味人、そして情熱を持つ森歩きの愛好家の物語がありました。知床の魅力や変化、そして写真を通じて感じる喜びや責任について、今回の研修で森歩きをコーディネートして頂いた佐藤雅子さんに話をお伺いしました。

以下　佐藤雅子さん：佐
インタビュアー：イ

北海道伊達市出身。10年間知床に通い続け、2002年知床に移住。趣味は知床の森歩き。

知床に興味を持ったきっかけ

イ：今回の弊社知床研修では大変お世話になりました。とても貴重な体験をさせて頂きました。早速ですが、知床に興味を持ったきっかけなどはありますか？

佐：知床に興味を持った切っ掛けは、知床旅情です。♫飲んで騒いで～～遥か国後に白夜はあける♫…この下りが心にとまり憧れはじめとなりました。数年して、知床の森、伐採反対運動の噂を耳にして、大の大人たちが、手を繋ぎ樹を囲んで守る森って、どんなだろうと、興味が深まりました。

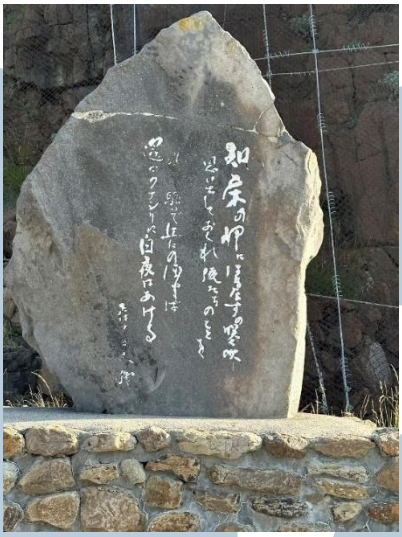
SNSや写真について

イ：毎日、素晴らしい写真をSNSに投稿されていますが、なぜSNSの投稿を始めたのですか？

佐：SNS発信は、業務ではじめました。今は業務ではないのですが、その流れで投稿してます。

イ：そうだったんですね。私も毎日佐藤さんの投稿を楽しみにしてます。動物たちの写真をとるコツやテクニックってあるんですか？

佐：ファインダーを覗いて瞬間を捉えようと集中する時間は好きですし、上手に撮りたい思いはありますが、基本、森歩きがメインで、出逢えた動物やシーンを残したくての証拠写真だったり、鳥や花の名前を調べるための材料だったりなので、お伝えできるテクニックなどはなくて…泣、逆に教えて欲しいくらいです。



知床のオンコロ岩の奥にある「知床旅情」の歌碑

佐藤雅子さんインタビュー

イ：それは意外でした。プロの方が撮ったような写真なので、色々なこだわりがあるかと思っていました。お気に入りのワンショットがあれば教えてください。

佐：データでは残っていませんが、お気に入りの一枚は、知床峠で眺めた日の出で、知床移住を決め、一眼レフデビューとなった写真です。

迫力満点の動物たちの写真(佐藤さんのFacebookから)

知床の魅力について

イ：すばり、知床の一番の魅力はどんなところですか？

佐：知床の魅力は、やはり豊かな自然かと思います。森、山、川、湖、海…、いろんな環境が凝縮されていて、一度に楽しめる。豊かな自然に育まれる動物たちとの様々な自然の姿との出逢い。人の生活圏が自然に入り込むようにあるので、日常的に自然を感じることができます。その一方で、人を寄せ付けない自然の厳しさも感じこともできます。

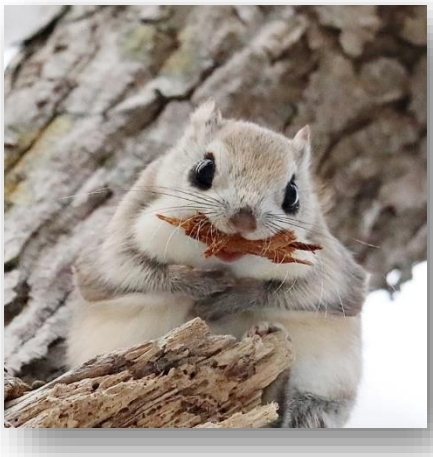
イ：私たちも今回の研修でそれらのことを感じることができました。今回の研修は夏でしたが、四季ごとに知床の良さがあると思います。その辺りはどうですか？

佐：春は厳しい冬を乗り切り、誇らしげに感じる様々な命、芽吹き、目覚め、新たな命の誕生、冬の生き物と夏の生き物の入れ替わりを感じることができます。夏は命の力強さ、秋になると冬支度で忙しくする動物たちの営み。色づく樹々、その景色。冠雪の山々。空気が澄んでくるので、星空、夕陽、日の出が一際きれいになります。森に響きわたるエゾシカのラッティングコール。川にもどるサケ、マス、そして、補食する動物たちに、命の連鎖を実感することができます。冬には流氷を見ることができますし、厳しい寒さを体感できます。

佐藤雅子さんインタビュー

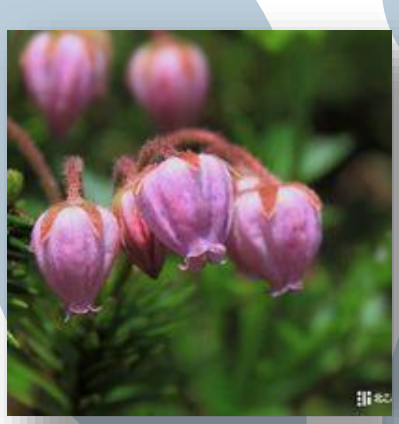
イ：佐藤さんのお気に入りの知床の魅力的な動物、野鳥、植物を１ずつ教えてください。

佐：１つに絞れないので、２つづつで☺　動物は、エゾモモンガ、ヒグマ。



佐：野鳥は、シマフクロウ、オジロワシ。

佐：お花は、ユキワリコザクラ、エゾノツガザクラです。



写真は佐藤さんFacebookから
※シマフクロウは場所特定防止のためSNSでの投稿が出来ないので、無料画像を使用。

佐藤雅子さんインタビュー

知床の変化・気づきについて

イ：ここ数年で知床での変化はありましたか？

佐：漠然とになりますが、植樹された樹が大きく育ち眺める景色が変わった気がします。また、世界自然遺産登録に伴ってなのか、どうか、又、良いか、悪いかは、別とて、散策路のルート変更や整備が進んでいること。利用ルートや規制が増えてることも挙げられます。

イ：なるほどですね。世界遺産登録されたことが色々と契機になっているのですね。動物たちはどうですか？

佐：駆除がすすみエゾシカが減り、それに伴い、植生が戻ったり、平野部でもシマリスとの出逢いが増えました。ヒグマの人慣れが進んでいるせいなのか、どうも、ヒグマとの出逢いが多くなった気がします。それに伴い、ヒグマ問題が深刻化し、駐車スペースの利用規制や釣りの規制などが行われ、新し法律も施行されたりしていますね。ヒグマやシマフクロウなどの動物狙いのアマチュアカメラマンが増えた気がします。また、流氷が少なくなっていますね。良くも悪くも、これからも変り続けていくのだと思いますが、知床の魅力だけは変わらない気がします。

知床での体験談

イ：知床での印象的な体験があれば教えてください。

佐：印象的な体験は、あり過ぎですっ…笑。知床岬へ歩いて行った時のこと、森で初めてヒグマに出くわした時のこと、初めてクマスプレーを使用した時のこと。エゾモモンガやイイズナ、クロテン、オオワシ、オジロワシ、シマフクロウ…、逢いたかった動物たちと、それぞれ初めて出逢った時のこと。動物たちの捕食、交尾、出産などなど、様々なシーンに初めて出くわせた時のこと。正に、一期一会の景色たちとの出逢い。語りつくせないです。

イ：一つ一つの出逢いが全て思い出になっているんですね。クマスプレーを使ったこともあるんですね‼逆に困難だったことや大変だったことはありますか？

佐：夏の夜の森でのモモンガの出待ちや、まだ、知床初心者の頃、森で迷いそうになったこと。怪我でいえば、川を探検して頬骨を折ったことですね。

イ：それは大変な経験ですね。やはり、山歩きをする際には特に初心者は十分な準備が必要ですね。

佐藤雅子さんインタビュー

皆さんに知ってもらいたいこと

イ：国内外からたくさんの観光客が訪れると思いますが、気を付けてほしいことなどありますか？

佐：知床から皆さんにお願いしていることが多々有るかと思います。例えば、動物へ餌やりをしない、ゴミを捨てない、植物を持ち込まない、持ち帰らない、ヒグマを道路で見かけたら車を降りない、止めない、近づかない…等々、どうしてダメなのか、お願いしているのか、その理由が解れば、自ずと行動が伴ってくると信じており、理解しようとして欲しいと思います。

カメラマンさんたちへの思いなのですが、私は、基本、動物にカメラを向けるコトは、どんなに配慮を重ねても多かれ少なかれ動物たちにストレスをかけていると思っており、撮影なんてしない方が良いとさえ思う事があります。でも、やめられないですから、撮影は極力一人でとか、しつこく追いかけないとか、邪魔にならないようにとか、近づき過ぎないとか…、動物たちへ思いやりを忘れず謙虚に感謝しながらと、思っています。ただ、ついつい夢中になってしまい出来てないことがあるとも思っているのですが、その心がけだけは常に忘れずにいるつもりです。

私のスタンスが、決して正しいとは思ってないですし、とやかく言える立場でもないのですが、道路で無線でやりとりしながらヒグマを追ってたりするのを目の当たりにすると、残念だったりやりきれなかったりもしてしまい、それぞれが、それぞれのスタンスを動物への思いやりをもって、行動を考えて頂ければと思ってます。知床に一般的に観光にいらっしゃった場合、ポイントは決して多くはないと思いますし、そんな声も多々耳にします。ただ、春夏秋冬、季節の違いや、朝や夕刻、時刻の違いや、霧や風や雨や雲…、気象状況の違い等、きっと出逢える景色は全然違ってきますし、動物との出逢だって違います。なので、１度行ったから…、ではなく、季節を変え、時間を変え、お出かけ頂ければと思います。

イ：私もまた知床に行きたくなっています。その際にはきちんとルールを守って、動物たちへの配慮を忘れないように心がけます。

今後の活動について

イ：今後、やりたいことや力を入れていきたいことはありますか？

佐：大それたものは何もないのですし、あくまで自分のためでしかないのですから活動ではないのかもですが、残りの人生、少しでも多く森にいたいと、少しでも多く森でのことを観ていたいと、思っています。又、好きな知床のことを伝えることがとても楽しく、私には貴重な時間と改めて認識しております。以前のように業務としては望めない今、両方を満たす術として、ガイドができればと思ったりしておりますそれを見据えてのSNS発信だったりもしています。実現するかどうか、生業とするガイドが目標だったり夢だったりしています。

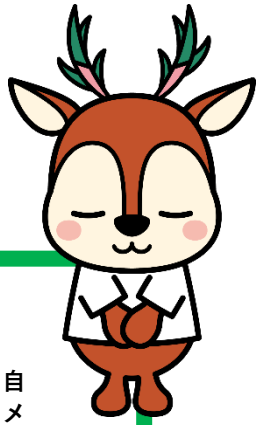
佐藤雅子さんインタビュー

イ：ありがとうございました。佐藤さんの知床への熱量が伝わりました。今回森歩きに同行させていただき、動物を見つけた時の佐藤さんのキラキラした目が忘れられません。また、私たちは午前中でお邪魔しましたが、そのあとも夜まで森歩きをしていたと聞いて驚きました。

知床の森の一瞬の美しさをキャッチし、それを世界と共有する行為は、ただの趣味を超えたものになっています。佐藤さんの言葉や写真を通じて、私たちも知床の持つ無限の魅力を再確認しました。何より、知床の美しさを感じるとともに、環境や文化を大切にすることが重要だと感じました。

知床五湖と知床連山
左端：佐藤雅子さん

研修後記



知床での研修を終え、私たちは自然の素晴らしさとその脆さを深く感じると同時に、自社の使命と経営理念とのつながりに気付かされる貴重な経験をしました。当社は漢方メーカーとして、「自然の恵みを大切にし、人々の健康と社会に貢献する」という使命を胸に、日々の業務に取り組んでいますが、知床での研修を通じてその重要性を改めて認識しました。

知床の壮大な自然環境と豊かな生態系は、私たちにとって自然の恵みの尊さとその繊細さを教えてくれます。自然がもたらす多様な植物や動物の生命力とその相互依存の関係を目の当たりにし、自然と調和したビジネスを行うことの大切さを再認識しました。私たちは単なる製品提供に留まるのではなく、その背後にある自然を守り、次世代にも受け継いでいくという責任を持つことを意識しなければなりません。

知床研修前後に行ったSNSでの情報発信も多くの人に関心を持っていただけたようで喜ばしいことでした。今後も積極的な情報発信を通じて、環境保護と社会貢献の取り組みを広く伝え、より多くの人々に共感を呼び起こせるよう努めていきます。

また、自然の中でからだを動かすことの重要性も体感することもできました。今回の研修では、2日間に渡って森を歩きましたが、普段デスクワークが多い私たちにとって、自然の中でのアクティビティは新鮮で心地よいものでした。
これらは単なる感想ではなく科学的にも山を歩くことで血圧低下に効果があり、脳疲労を改善することが実証されています。当社のサステナビリティの重要課題の中には「人々の健康に貢献」「従業員満足度 幸せの向上」と健康に関するテーマが含まれています。健康は私たちの財産であり、持続可能な未来を築くための土台でもあります。今後、サステナビリティ推進室として健康に関する課題をさらに深化させ、具体的なプログラムや取り組みを展開できるようにしていきます。

これからサステナビリティやSDGsの考え方が益々、重要視されます。それは、人の幸せと地球環境の問題がイコールで繋がっているからではないではないでしょうか。地球環境を無視した人の幸せや発展は、もはや成り立たなくなっています。日本は本当に自然が豊かな国です。少し足を延ばせば、そこには木々が生い茂り、川が流れ、海があります。是非、休みの日には、山や海、川に赴いて「自然」について考えてみてください。身近な自然に触れて、その素晴らしさに気付くことがサステナビリティの第一歩なのかもしれませんね。

Special Thanks

-知床財団の皆様-
知床財団は知床の自然の本質を見極め、モニターしていく「知る活動」、それらをベースに知床の自然環境を適正に保全・管理していく「守る活動」、そして知床の自然のすばらしさや、私たちの先駆的な取り組みを社会に発信していく「伝える活動」を行っています。今回の研修では、座学、ウトロ市街視察、しれとこ100平方メートル運動地を案内していただきました。

-佐藤雅子さん-
今回の知床の森歩きを案内して頂きました。

佐藤雅子さん
Instagram(右)
Facebook(左)

知床財団
webサイト(右)
Facebook(左)